新・夢千代日記

早坂暁

新・夢千代日記

一九八四年一月三〇日　第一刷発行
一九八四年二月二九日　第四刷発行

著　者　早坂　暁

発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口一-三三-四
郵便番号　一一二
電話　(二〇三)三四五一一
振替　東京六-六四二二七

印刷所　奥村印刷
製本所　ナショナル製本
装　画　竹久夢二
装　幀　市川英夫

©1984 A. HAYASAKA Printed in Japan
ISBN4-479-54017-2
乱丁本・落丁本はお取替します

新・夢千代日記

早坂暁

新・夢千代日記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

●山陰の空の下

空一面に低く鉛色の雲がたれ込めている。

列車が淋しい川べりを走っている。

もうすぐ川は日本海にそそぐのだけれど、川面にうかぶ舟影もなく、また川べりに家もなく、ひどく淋しい風景である。——城の崎に近い玄武洞あたり。

夢千代の声「十一月七日、山一つ越えると、やはり空は鉛色になっている。……わけもなく、淋しい」

つくづくに山陰の天は鉛にて
誰か明るき花を挿してよ

鉛色の濃淡をにじませて動く雲のあたりに、手がのびて一輪の椿が挿された。

赤い椿の花が、まるで悪い夢のように美しく、鉛色の空にささっている。

●走る列車の中で

夢千代（永井左千子）が、車窓に顔を寄せ、空をみつめている。

夢千代「……」

車内はひどく空いており、男女三人の一組と、もう一人の男の客が、それぞれ離れて坐っているのみである。

男女三人の組は、四十すぎの男と三十ぐらいの女性、

そして、地味な背広姿の男である。
四十すぎの男は、くい入るように窓外の景色を見つづけている。
着ている服は、中国の人民服のようである。
——王永春、四十二歳。
三十ぐらいの女性は、ボランティアの通訳である。
——土屋加津子。
王永春の耳元に、土屋加津子が中国語で何か言っている。
うなづく王永春。
王「……」
うっすらと、涙をうかべている。
夢千代「……」
不意に目がくらむ。
両手で目をおさえて、耐える。
夢千代の声「……地の底に引きずり込まれる。……また再び神戸の病院へ通うことが出来るのだろうか」
薬をとりだして、飲む。
夢千代の声「……あの人も、きっと私に似た思いで、この同じ線路を運ばれて行ったのでしょう。……あれは、明治の終る年……」

●列車の中で

これは明治末年の汽車の中。蒸気機関車の汽笛が響き、セピア色の世界である。
夜の車内に、インバネスを着てソフト帽子を真深かにかぶった男が、黙然と坐っている。
——前田純孝・二十七歳。
咳込む。
五十すぎの男が、付き添っている。
——純孝の岳父、秋庭である。
秋庭「大丈夫かね……」
純孝「大丈夫です」
が、咳込む。
ハンカチで口をおさえる。
ハンカチには、真紅の血がにじんでいる。
秋庭「!……（暗い窓外を覗き）もうすぐ城の崎だ。……城の崎には、出迎えの人が来ているはずだから」
純孝「どうも有難うございました」
秋庭「何を礼など言うんだ」

純孝「お義父さん、どうか、のぶと美津子をお願いします」
秋庭「わしがついております。出来るだけのことはします。だから、早く体を元気にして帰っていらっしゃい」
純孝「……」
秋庭「いいですな」
純孝「私はもう……二度と帰れないでしょう」
秋庭「何を言うんです。美津子はまだ小さい。……父なし子にしないで下さい。きっと帰ってくるんですよ」
純孝「……」
また、咳込む。
純孝は重い肺結核である。
暗い窓外に前田純孝の和歌が、うかびあがる。

病める者世に用はなしかくの如く
我は思へり汝も思ふや
前田純孝

●走る列車の中で

夢千代は純孝の和歌を口ずさむ。
トンネルに入った。
夢千代の声「当時は、まだ餘部の鉄橋がなく、純孝の故郷、浜坂へは城の崎から船でした」
トンネルを出た。

●餘部の鉄橋

四十一米の高みを、列車が速度を落して通りすぎてゆく。

●走る列車の中で

王永春が、眼下にひろがる景色を見ている。
王「！……」
小さな漁港とわずかな人家が、心細くわびしげに鉛色の海に対している。
加津子「アマルベ」
王「アマルベ」
加津子が中国語で説明している。
しきりにうなづいている王。
夢千代「……」
その時、前方の座席で一人の若い男が立ちあがった。
立ちあがるなり、何かを鋭く叫んで、拳で窓ガラスを

撃った。
窓ガラスは微塵に砕けて散った。
ガラスはキラキラと氷の破片のように、空中を舞いおちてゆく。
夢千代「！」
男は、そのまま崩れるように座席に腰をおとした。
夢千代「……」
そっと、近づく。
男は苦しげに目をとじている。
右手はなげ出すように膝の上にあるが、血だらけである。
夢千代「大丈夫ですか」
男「……」
男は返事するでもなく、頭を左右に振っている。
苦しげに、ぐらりぐらりと左右に振っている。
夢千代「……」
ハンカチをとり出し、男の右手を包んだ。
男は目をあけて、不思議そうに夢千代を見つめた。
むこうから、王や加津子たちが背のびするようにして見ている。
車掌が入って来た。

●浜坂の駅で

車掌に腕をとられて、男が列車から降りてくる。
男の右手には夢千代のハンカチが巻かれている。
夢千代も一緒に降りてきた。
男は駅舎に連行されていく。
遅れて王の一行がプラットホームに降りた。

●駅舎で

公安官が男を調べている。
夢千代も参考人として同席している。
公安官「なぜ、あんなことをしたんですか」
男「……自分でも、よく判りません」
公安官「判らん?!」
車掌「では、よろしく」
発車のベルが鳴っている。
車掌「目撃者は、もう一組いましたから」
公安官「その人らの名前と住所は？」
夢千代「ここで降りられたようですけど」

車掌「あ、あの人らだ。よろしく!」
　車掌は急いで列車にひきかえしていく。
駅員「ぼくが聞いてきます」
　若い駅員が、王の一行を追っていく。
公安官「名前は?」
男「は?」
公安官「あんたの名前ですよ」
男「……」
　強く、眉をひそめている。
公安官「言って下さい、名前を」
男「……すみません。今、思い出せないんです」
公安官「思い出せない?! 自分の名前ですよ!」
男「……」
　必死に思い出そうと苦しんでいる。
　その様子は嘘とは見えない。
男「……思い出せません」
公安官「自分の……」
夢千代「この人、病気じゃないでしょうか」

●駅前で

　王一行に追いついている駅員。
加津子「煙草屋旅館という宿屋はあります?」
駅員「ああ、ありますよ」
加津子「そこに泊っていますから」
　同行の背広姿の男が、名刺を渡す。
駅員「(名刺をみて)ああ、援後会の方ですか……」

●駅舎で

　不意に立ちあがる男。
公安官「君!」
　男、ふらふらと歩きだす。
公安官「おい、君!」
　男の腕をつかんだその瞬間、男の右手が、きらめくように伸びて、公安官の顔に炸裂した。それは炸裂という言葉にふさわしく、公安官の体は、ふっ飛ぶ。
　そのまま倒れて、動かなくなった。
　まわりの駅員が立ちあがってくるが、男は椅子をつかむと、駅員たちに向って投げた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

駅員たちは、ひるむ。
男は何を思ったか、立ちすくんでいる夢千代の手を摑(つか)んで、駅舎を走り出る。
駅員「警察だ！」

●駅の前

夢千代の手を摑んで駈け出てくる男。
夢千代「やめて下さい。私は走れないんです。……走れないんです」
しゃがみこんでしまう。
夢千代「……」
息が切れて、あえぐようにしている夢千代。
男「！……すみません」
男はひどく驚き、優しい声を出してのぞき込む。
男「大丈夫ですか……」
夢千代「……大丈夫です」
向うから、巡査が走ってくるのが見える。

●警察署で

湯の里警察署は、古びたコンクリート二階建である。

●刑事室で

例の男を調べている藤森刑事課長。
夢千代も一緒である。
藤森「自分の名前が判らん?!」
夢千代「本当なんです」
藤森「夢千代さん、あんたは黙っとって下さい」
夢千代「でも、そうなんですから」
藤森「あんたは医者かいね」
夢千代「ですから、早くお医者さんに診てもらって下さい。(男に) 大丈夫ですか」
男はうなだれたまま、苦しげに椅子に腰かけている。
藤森「ああ、近寄らんで！ この男はあんたを人質にして逃げたそうじゃないか」
夢千代「人質？ そんなのとは違うと思います……」
藤森「だって、そうじゃろうね、あんたの手をつかまえて、走りだしたんじゃから」
夢千代「でも、走れないといったら、すぐ止まってくれました」
藤森「とにかく近寄らんで」

夢千代を遠ざける。
藤森「調べるよ」
藤森は半分身構えながら、男のポケットをさぐる。
男「！」
素早く立ちあがって、藤森の手を払った。
藤森「痛い！　おい、何をするんだ！」
男「……」
コブシを固め、まるで拳闘選手のように身構えている。
その目は野獣のように光っている。
藤森「おい手錠だ、手錠をかけろ！」
警官や若い刑事たちが、とりかこむ。
藤森「抵抗すると、承知しないぞ！」
藤森、興奮して叫んでいる。
夢千代「！……」
刑事「おとなしくしろ！」
やや恐る恐るの態で、男の手に手錠をかける。
男「……」
悲しげに、そしてまるで助けを求めるように夢千代を見、おとなしく両手を出す。
夢千代「手錠はやめて下さい……」
しかし、手錠がかかった。
藤森「夢千代さんは帰って下さい。またあとで事情を聞きますから」
夢千代「でも……」
藤森「今日は病院へ行った帰りなんでしょう」
夢千代「ええ……」
藤森「どうでしたか」
藤森は、本当に心配な様子で聞いた。
夢千代「いつもと同じですから……」
微笑してみせた。
藤森「さ、早く帰って休んで下さい」
夢千代「じゃ、どうかあの人、よろしくお願いします」
藤森「ああ」
男は手錠をされて、刑事たちの手でポケットの中のものを調べられている。
ハンカチや、切符、財布などが出てくる。
夢千代「……」
男が夢千代を見つめている。
男「これ……」
手錠の手をさし出す。

手を包んだ、血に染まったハンカチのことらしい。
夢千代「どうぞ」
うなづくようにして、夢千代は出ていく。
男「……」
男は首をめぐらして夢千代を見送る。
まるで、見捨てられる小犬のようである。

●湯の里温泉街で

川べりに荒湯の蒸気が湧き立っている。
橋を渡って、夢千代が帰ってくる。
小夢が橋のたもとに立っている。
小夢「おかあさん！」
小走りに駈け寄ってくる。
置屋では女主人を〝おかあさん〟と呼ぶ。
夢千代「ただいま。……何かあったの？」
小夢「変な人が来てます」
夢千代「変な人？」
小夢「娘に会いに来たって……」
夢千代「娘に？　娘って、誰？」
小夢「おかあさんのことらしいです」
夢千代「じゃ、私のお父さん……」
小夢「だ、そうです」
夢千代「……私には、お父さんは居ないわ」
小夢「じゃ、やっぱりインチキなんだ」
夢千代「私のお父さん？……」

●はる家で

夢千代と小夢が、そっと玄関の戸をあける。
小夢「あ、靴がない」
奥から、おスミさんが出てくる。
スミ「あ、お帰りなさい」
夢千代「ただいま……」
小夢「さっきの人は？」
スミ「菊奴さんが連れ出してくれました。多分喫茶店の白兎だと思います」
夢千代「どんな人でした？」
スミ「六十ぐらいの……、ほこりだらけの靴をはいとられました」
夢千代「名前は？」
スミ「それをおっしゃいませんで、左千子に会えば判ると

……」
小夢「その人ぜんぜん、おかあさんに似てません」
夢千代「白兎に行ってみます」
スミ「一度上にあがって、ゆっくり休んでから出かけて行ったほうが、ええんじゃありませんか。疲れてはるんでしょうに」
小夢「そうです。菊奴さんが連れ出したんなら、ゆっくりで大丈夫です」
夢千代「……じゃ、そうするわ」
　腰をおろし、一息つく夢千代。やはり疲れているのだ。
スミ「大丈夫ですか」
夢千代「少し、走ったの」
スミ「走った？」
夢千代「ええ、男の人と」
スミ「それ、どういうことですか」
夢千代「あら、アコちゃん」
　アコが学校から帰ってきた。
アコ「ただいま……」
　奥へ入ってしまう。
夢千代「早びけじゃないの」

●茶の間で

　アコが、茶の間にあがる。
　茶の間の卓袱台にあるふかし芋を一つ、手にとって階段をあがってゆく。
スミ「お母ちゃんは、出かけてはるからね」
　夢千代、茶の間に坐る。
夢千代「？……」
　台の上に、煙草と百円ライターがおいてある。
スミ「忘れて行きはったんです」
夢千代「やっぱり私、行ってきます」
スミ「お茶だけでも、飲んでいったら？……顔色がよくありません」
夢千代「着がえてきます」
　夢千代、奥へ入る。

●夢千代の部屋で

　夢千代、仏壇の前に坐る。
夢千代「……お母さん」
　母の位牌がある。

夢千代「お父さんが生きているなんて、そんなこと、ないですよねえ」

●茶の間で

金魚が帰ってくる。

鳥取市まで買い物に出かけてきたとあって、洋服姿がきまっている。

金魚「あー、疲れた、疲れた。ウーさん、車で送ってくれるのかと思ったら、鳥取駅までで、さようならだって、ほら、小夢ちゃん、帯どめ」

小夢「あら、すみません！」

スミ「金魚さん、アコちゃんが帰ってきてはるよ」

金魚「アコが?! どっか悪いのかしらん」

スミ「お芋つまんで上っていったから、体は悪いんじゃないと思うけど」

金魚「じゃ、さぼったんじゃないの。(上に) アコ……アコ！」

返事がないので、階段を上っていく。

スミ「でも、ひょっとしたら体かも知れないから……」

夢千代が普段の着物を着て出てくる。

夢千代「おスミさん。じゃ、ちょっと行ってきます」

スミ「気をつけて。あ、お茶入ってます」

夢千代「ありがと」

お茶を手にする。

小夢「あたし、一緒に行きます」

夢千代「大丈夫」

小夢「駄目です。相手は年寄りでも男の人だで」

階段から、金魚が大慌てでおりてくる。

金魚「どうしよう！」

夢千代「どうしたの、金魚さん」

金魚「アコがねえ、アコが、なっちまっただ」

夢千代「なっちまった？」

金魚「女になっただらあ」

夢千代「女に……。まあ、あれが……」

金魚「そうらしいだ。厭になっちまった。どうしよう」

夢千代「そんなにウロウロしてないで、ちゃんと坐って」

金魚「(坐る) 生理があっただが、まだアコは四年生ですし」

小夢「あら、近頃は五年生でも珍らしくないって」

金魚「うちのアコは四年生だ。あたしが芸者なんかしてるからかしら」

スミ「そんなことないでしょう」
金魚「厭ァね、あたしなど中学校三年生の時だ」
小夢「それは遅すぎるわ」
金魚「あんなの遅くてええんだ」
夢千代「そういうことだったら、別に病気じゃないんだし、慌てることないでしょ」
金魚「そりゃァそうだけど、なんだかすごく厭だわ」
二階から、アコがおりてくる。
みんな、沈黙してアコを見つめる。
アコ「……なァに」
夢千代「なんでもないわ。こちらへいらっしゃい」
アコ「遊んでくる」
土間にとびおりるようにして、靴を突っかける。
金魚「アコ！　出かけちゃダメよ。寝てなさい！」
アコ「寝てなくていいって、先生が言ったわ」
走り出ていく。
金魚「アコ！」
スミ「今晩、お赤飯を炊きましょ」
金魚「お赤飯……」
夢千代「そうね、それがいいわ。おスミさん、そうしてあげて」
金魚「……」
押し黙っている金魚。
夢千代「どうしたの」
金魚「……実の親だったら、お祝いする気持ちになるんですかねぇ。あたし、なんだか厭な気がするだけで……。血がつながっていないと、こうなのかしらん」
夢千代「そんなことはないわ。金魚さんは、ただ、急だったので、びっくりしているだけなのよ」
金魚「……そうですね、びっくりしているだけですよね」
金魚、急に涙ぐんで立ちあがる。
夢千代「金魚さん……」
金魚「情ないですね。なんかがあると、血がつながっていないとか、そんなことばっかり言っとる自分が、ほんとに情ないです。……おスミさん、お赤飯はあたしが炊きます」
スミ「いいよ、あたしがしてあげるから」
金魚「その代り、教えて下さい。お赤飯の作り方、知らないの」
スミ「いいですよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com